

恋う

庇と庇の間からのぞく空を
身を乗り出して見上げていた
夜明けの雲を染めてゆく
薄紫の、薔薇色の、緋色の光

たちまちに消え去る
一度限りのもの
けれどきつと立ち返り
決して消え去らないもの

空のなかにまなざしがあつた
地中の虫が這い出るように
身をよじって
窓から空を見上げていた
軋む欄干に体を預けて

湧き上る白雲
刻々と変容しながら
途切れることの無い悠久の営み
まなざしの奥に開かれるもうひとつの空

青い聖衣がまぶたにふれる
ちぎれるほどに身をよじり
よじりながら空を見上げる

いまだ開かぬまなこで
光を
恋う

松本礼子